加害展示の撤去をねらう
ピースおおさか「展示リニューアル構想」に反対の声を！

伊賀正浩
（子どもたちに渡すな！あぶない教科書　大阪の会）

４月９日、財団法人大阪国際平和センター（以下、ピースおおさか）から「展示リニューアル構想」（以下、「リニューアル構想」）が公表されました。「リニューアル構想」は、橋下・維新の会による激しい「偏向」「自虐的」との攻撃に対して、加害展示を大幅に削除し、大阪大空襲をアジア太平洋戦争から切り離し、その被害だけに特化する展示に転換しようとするものです。これは、ピースおおさかが２０年以上にわたって掲げてきた「基本理念」を自ら投げ捨てることに他なりません。大阪で進められてきた反戦平和教育や全国の戦争資料館のあり方に大きな影響を与えるもので、強い危機感を持っています。

「リニューアル構想」は、急速に具体化しつつあります。この４月1日から館長、事務局長、事業課長、資料係、専門職員の全てが入れ替えられました。これまでピースおおさかの展示を支えてきた研究者や運動との関係が断ち切られてしまいました。そして、ピースおおさか展示リニューアル設計業務の委託事業者の公募が始まり、５月中旬には事業者が決定されました。事業者は展示テーマの構成・展示項目・展示シナリオの検討をする基本設計業務と展示内容・演出方法・設備計画の確定を行う実施設計事務を請け負います。すなわち、大阪府・市の意向を受けて「展示リニューアル」の中で大きな位置を占めています。

大阪府・市、ピースおおさかは、来年度予算に「リニューアル構想」を予算化するために、今年の８月頃までに展示内容の大枠を固めるつもりです。時間的余裕はあまりありません。様々な団体・個人から早急にピースおおさかに対して「展示リニューアル構想」に反対の声を届けてください。

ピースおおさかの歴史的意義と右派からの攻撃

(1)ピースおおさかは、1981年に平和祈念戦争資料室を大阪府が開設したことを出発点としています。そこにはベトナム戦争をきっかけにして広がった大阪大空襲の記録化を進める体験者と研究者の地道な運動がありました。大阪大空襲の記憶を語り継ぎ二度と戦禍を繰り返さないということ、大阪大空襲被害者には在阪朝鮮人がおり、それは日本の朝鮮植民地化に起因することが確認されています。そして、大阪空襲被害者の記録化と国家補償を求める運動、朝鮮人中国人強制連行と強制労働の真相調査の運動、それらを子どもたちに継承しようとする教育現場での反戦平和教育等と結びつき、1991年ピースおおさかの設立となったのでした。つまり、ピースおおさかの存在は、これらの運動の成果と大阪府・市民の二度と戦争を起こしてはならない決意の結晶でした。

さらには、1980年代まで全国の平和資

料館が被害展示中心だった中で、ピースおおさかの誕生は、加害と被害を総合的に展示しようとする新たな取り組みの先駆けとなりました。立命館大学国際平和ミュージアム（1992)、川崎平和館（1992)、埼玉県立平和資料館(1993)、軍都広島を展示に加えた広島平和祈念資料館の改築（1994)、沖縄戦での国内外を問わず全ての犠牲者を刻む平和の礎（1995）等々。

これらの資料館も現在、右派から加害展示について「偏向」等の厳しい攻撃を受けています。ピースおおさかの加害展示を守ることは、全国の平和資料館のあり方を左右する極めて重要な意義を持っています。

(2)1996年自民党は「全国の戦争博物館に関する調査報告書」で、ピースおおさかが「特定のイデオロギーの宣伝活動拠点となっている」などと批判を開始し、「新しい歴史教科書をつくる会」等の右派団体は、ピースおおさかの加害展示に対して攻撃を集中してきました。2000年に右派は、「20世紀最大のウソ・南京大虐殺の徹底検証」をピースおおさかで開催するところまでいきました。

しかし、ピースおおさかの最大の危機を立て直したのは、大阪での地道な大阪大空襲を記録化する広範な運動でした。アメリカのアフガニスタンへの侵攻（2001年)、

ピースおおさか「刻の庭」

イラク侵攻（2003年）での無差別爆撃への怒りと危機感が背景にありました。2005年8月、ピースおおさかは「大阪空襲死没者を追悼し平和を祈念する場」として「刻の庭」を設置し、8980名(2009年3月31日時点）の大阪空襲戦没者名が「とき」の証言として刻まれました。2009年には「刻の庭」の壁面に大阪大空襲犠牲者と同じ数(約15000個）の色とりどりのタイルが子どもたちの手によって張り巡らされました。「刻の庭」は空襲犠牲者を追悼する場として確固たる位置を占め、いまや博物館的活動にとどまらず、反戦平和教育のための施設としてなくてはならない存在となったのです。現在、小中学生の来館は全体の6～7割に達しています。

さらに加害と被害を総合的に展示するピースおおさかの姿勢は、世界各地、とりわけ中国や韓国など東アジアの人々から支持され、アジアとの友好関係を深めていく上でも重要な役割を果すものとなっています。外国人来館者は開館当時と比べて8倍となっています。

(3)橋下知事（当時）の登場によって、ピースおおさかの危機は新たな段階に入りました。2008年橋下知事は、大阪府財政再建のための府施設の見直しの典型としてピースおおさかを取り上げました。その結果、「財政再建プログラム」において、府市から出している職員を全廃し非常勤再任用とし、2010年度からは事業費を全額カットしました。それ以降、ピースおおさかの平和記念集会や様々な事業は、ピースおおさかを支える有志による個人的努力にも支えられてきたのです。

2011年大阪維新の会は、ピースおおさかプロジェクトチームを設置し視察と称し

てピースおおさかに何度も足を運び、加害展示を問題視してきました。同時期、大阪市議会・府議会においても、維新の会議員や自民党議員が「ピースおおさかを西の遊就館（＊）にする」「偏向展示での反日教育、歴史をねつ造した責任は重い」等、の批判を浴びせかけ、ピースおおさかの「展示室Ｂ(15年戦争)」の廃止を要求しました。

大阪府知事・市長のダブル選で維新の会が勝利してからは、ピースおおさか独自で進められてきた展示リニューアル計画は棚上げされ、大阪府市統合本部に設置された都市魅力戦略会義(部会長：橋爪紳也）によって展示内容を「ゼロベース」から検討することになりました。これ以降、展示リニューアル案は、橋下市長と松井知事、都市魅力戦略会義と大阪府市人権室主導で行われ、４月に公表された「展示リニューアル構想」となったのです。

(＊)靖国神社境内にある「国防思想の普及」を目指した軍事博物館

「展示リニューアル構想」の問題点と展示充実のための提案

(1)「リニューアル構想」には、その方向性として「大阪空襲の犠牲者を追悼し、平和を祈念」し、「大阪空襲を中心」とした展示にすることが明記されています。しかし、実際には大阪大空襲をこれまで以上により詳しく、より深く展示しようとする姿勢は全くみられません。ピースおおさかに日の目を見ずに保管されている膨大な戦争遺物をどう展示化するか、国家補償を求める空襲被害者の思いをどう生かしていくか等々、緊急の課題について全く明らかにされていません。

大阪大空襲とは、1945年3月１３日、１４日の大空襲に始まり、6月1日、7日、15日の４次にわたる大阪市街地をねらい打ちにした無差別焼夷弾攻撃と7月10日の堺市街地への焼夷弾攻撃、6月26日・7月24日の住友金属桜島工場と大阪砲兵工廠を目標とする爆撃、8月14日の大阪砲兵工廠と京橋への大空襲に至る計８回の大空襲のことです。その結果、大阪府内の家屋約34万戸が全焼し、罹災者約122万人、死者約1万2600人、行方不明約2000人

ピースおおさか「展示室Ａ」

もの犠牲を出しました。これらの被害を生み出した大阪大空襲を歴史に刻み、被害者を追悼し続けることは今後も大切なことです。

在日朝鮮人は、大阪市街地に木造住宅に密集して住んでいたために、極めて大きな被害を受けました。大阪における被害者総数の約8.2%。それは大阪在住朝鮮人の４人に１人にあたり、空襲の被害を受けた全国の朝鮮人の35%に及びました(「特高月報」：１９４５年６月の大阪の朝鮮人戦災者数は８３９００人より計算)。これまでの展示の中でも在日朝鮮人・中国人の被害についてほとんど触れられていません。ピースおおさかが全ての被害者の追悼の場となるよう、一層実

相に迫る展示にしていく必要があるのではないでしょうか。

⑵大阪大空襲は、アメリカによる住民と市街地を直接標的とした無差別爆撃＝戦略爆撃でした。無差別爆撃はアメリカ軍に固有のものではなく、第2次世界大戦前夜の1937年ドイツ軍による「ゲルニカ爆撃」に始まります。ドイツ軍は、焼夷弾を大量投下(1.8人当たり1発)し都市を焼き尽くしました。この「ゲルニカ爆撃」を直接受け継ぎ、大規模化させたのが日本軍による中国都市への無差別爆撃でした。日本軍は日中戦争の当初からその残虐性を強めていったのです。1937年から45年までに日本軍が中国の上海・南京等に投下した爆弾は24万発（うち焼夷弾は約20万発）を越えました（「空爆の歴史」（岩波新書）ｐ５３）。中でも日本軍が最も組織的・意図的に行ったのが首都重慶への戦略爆撃でした。5年間にわたり218次の空爆回数を数え、空爆による直接の死者だけで約1万2000名にのぼっています。日本軍の重慶爆撃こそ「戦略爆撃」を掲げておこなった最初の無差別爆撃でした。アメリカ軍による日本への空襲は、都市そのものを直接の標的にした点でも、対人殺傷爆弾（焼夷弾）を多用し「空からの大虐殺」をおこなった点でも、

日本軍による重慶爆撃

日本軍の戦略爆撃と本質は同じでした。その延長線上に広島・長崎の原爆投下が行われたのです。

戦略爆撃は、第2時世界大戦以降もアメリカによって朝鮮戦争とベトナム戦争、最近では湾岸戦争とアフガン戦争、イラク戦争へと引き継がれています。兵器も焼夷弾から細菌・毒ガス兵器や枯れ葉剤、ナパーム弾や劣化ウラン弾、そしてクラスター爆弾へとその残虐性を拡大再生産させてきたのです。

「展示リニューアル」では、大阪大空襲の歴史的意義として「米軍調査団の見解」や「他都市の空襲との違い」しか項目としてあがっていません。大阪大空襲の歴史的意義は、過去から現在にわたり絶えず繰り返されてきた戦略爆撃の非人道性を断罪する歴史的展示の中に位置づける必要があるのではないでしょうか。

⑶「リニューアル構想」は、「大阪中心」を強調していますが、かつての戦争における大阪の特殊性を浮き彫りにはしていません。「大阪には『軍都』という側面があったこと」は指摘していますが、展示内容は「別立てで詳しく」とあるだけで、全く具体性のないものとなっています。

当時大阪は、日本の経済を支える最大の産業都市であっただけでなく、日本最大の兵器工場＝大阪砲兵工廠があり、大阪の産業が砲兵工廠下に系列化され（大阪砲兵工廠の兵器製造はその７７％を大阪民間企業に外注）ー大軍需工業地帯であったことを忘れることは出来ません。現在もそれらは展示されており、「軍都」大阪の姿を来館者に明らかにしようとしています。しかし、武器は製造して終わりではありません。今後、大阪砲兵工廠が製造した大砲や砲弾、

当時の大阪砲兵工廠

戦車が中国やアジア太平洋地域での侵略戦争でどのような役割を果たしてきたのか、明らかにすることが重要になっています。

大阪砲兵工廠は、日清・日露戦争からアジア太平洋戦争全体にわたり火砲と弾薬を製造し、侵略の最前線に送り続けました。1936年の陸軍「軍需整備５カ年計画」によって大阪砲兵工廠（3製造所）は７製造所に拡張され、砲弾、野戦級の焼夷弾、照明弾の増産に全力をあげました。これによって日本全体の兵器生産の３６％を担う、名実ともに日本最大の軍需工場にのし上がったのです。日本軍が上海から南京に侵攻していた1937年10月の「支那事変業務実施報告」（陸軍造兵工廠長官作成）によると、陸軍は兵器代として大阪砲兵工廠に兵器支払額全体の４１．６％を支払っていたことが記載されています。大阪砲兵工廠なくして日本の中国侵略は遂行できませんでした。

日本軍が中国各地に侵攻し、占領地を拡大するたびに大阪の軍需経済は沸き、中でも南京占領時には府民による「提灯行列」もおこなわれました。日本軍の南京占領2日前の１１日には祝賀行事のトップを切って大阪市内全小学校児童３７万人が「日の丸」の小旗を持ち市内を練り歩き、１３日以降は全市をあげて祝賀大会と「提灯行列」が行われました。１１日から１４日までに大阪市内だけでのべ約７０万人、人口の4人に1人が参加したことになります。

大阪砲兵工廠での兵器製造と中国大陸での殺戮、その都度沸いた大阪経済、これらを空間的に結びつけて展示し、その教訓を新しい世代に継承する必要があります。

(4)近代大阪の都市基盤の整備、大阪砲兵工廠に連なる軍事施設建設と「本土決戦」を想定した地下軍事施設の建設などには、多くの在日朝鮮人・中国人の労働がありました。これらの事実は、粘り強い戦争遺跡を掘り起こす市民運動によって徐々に明らかにされてきました。生駒トンネル建設・新平野川改修・光明池堤防建設・淀川改修等の都市基盤のを形成する労働、紡績業での労働と阪神工業地帯の形成、大正飛行場・多奈川の呉海軍建築部などの軍事施設への動員、生玉公園地下防空壕・池田市海軍五月山魚雷格納庫・陸軍高槻地下倉庫（タチソ）と周辺の地下工場地帯・羽曳野市の陸軍航空廠駒ヶ谷地下工場地帯・「どんずるぼう」など地下軍事施設建設での労働、安治川・川口・大阪港等での中国人の港湾労働等々。

しかし、「リニューアル構想」には、これらの視点は全くないばかりか、空襲によって多大な被害を受けたことについても触れていませんし、貴重な歴史を掘り起こした市民運動との結びつきを完全に絶とうとしています。展示内容のリアリズムは、現実の歴史を掘り起こす運動との結びつきなくしてはありえません。

(5)これまでみてきたように、「リニューアル構想」は大阪大空襲を充実化させるものでも、大阪大空襲の歴史的意義を明らかに

するものでも、「大阪中心」を徹底させるものでもありません。橋下・維新の会の真の狙いは、「リニューアル構想」で「大阪空襲中心」にすることによって、「展示室Ｂ(15年戦争)」の加害展示を全面的に撤去することにあります。ピースおおさかの設置理念には、「第2次大戦において、大阪では50回をこえる空襲により、市街地の主要部分が廃墟と化しました。……数多くの日本国民が尊い命を失い、傷つき、病に倒れました。同時に8月15日に至る15年戦争において、戦場となった中国はじめアジア・太平洋地域の人々、また植民地下の朝鮮・台湾の人々にも多大な危害を与えたことを、私たちは忘れません。」とあります。この設置理念を何としても守りぬき、加害展示の継続を求めていきたいと思います。

「近現代史を学ぶ施設」構想と連動した「リニューアル構想」

(1)橋下市長は、昨年5月に「両論併記」の「近現代史を学ぶ施設」構想をぶち上げました。しかし具体化はあまり進んでいませんでしたが、橋下市長・松井知事が単独の施設とする方針を決めたことで、ピースおおさか「リニューアル構想」は、「大阪大空襲中心」へと大きく舵を切ることになりました。その意味では、「リニューアル構想」と「近現代史を学ぶ施設」構想を連動したものとして批判していく必要があります。

今年度に入り、橋下市長が提唱する「両論併記」の「近現代史を学ぶ施設」構想が動き出しています。４月に橋下市長は、小泉・安倍(第1次)政権時の安全保障のブレーンであった北岡伸一氏を監修責任者に任命し、2名のアドバイザー（日暮吉延氏、熊谷奈緒子氏）をつけました。そして基本構想策定のための予算も確保し、来年度には「基本計画」を確定、再来年度には建設開始の計画です。

「近現代史を学ぶ施設」の全体像はまだ見えてきませんが、橋下市長は「新しい歴史教科書をつくる会」等の右派の意見も取り入れ、日本軍「慰安婦」問題や南京大虐殺、領土問題、東京裁判、沖縄戦等を扱うと発言しています。「両論併記」を口実にして歴史歪曲をおこなうのは、歴史修正主義者の常套手段です。一連の橋下市長の「慰安婦は必要だった」「強制連行ではなかった」等の発言をみれば、加害事実の否定を目論んでいることは明らかです。

(2)歴史認識は市民の手によって闘い取るものです。それは20年来のピースおおさかの歴史が物語っています。大阪の反戦平和運動、加害責任と戦後補償を求める運動、反戦平和教育と「日の丸・君が代」強制反対運動等、これまで大阪で取り組まれてきた様々な運動が手を携えて、大阪での歴史認識を後退させる攻撃に対して抵抗していきましょう。「ピースおおさか」への見学会と意見の投書、展示内容への要望書の提出など、様々な側面から市民の声を届けていきましょう。

【「展示リニューアル構想」からの抜粋】

(2) 狙いと展示内容

① 「大阪空襲」

【狙い】

○空襲で大阪が焼け野原になり、多くの人が死んだり怪我をしたことを実感する。

○当時の市井の人々の暮らし（特に子どもの日常、苛酷な体験）を知る。

○大阪に「軍都」という側面があったことを知る。

○太平洋戦争が国家・国土・国民そのものを標的とする国家総力戦の様相を帯びていたこと、その中で空襲という戦術が編み出されたこと、空襲が昭和初期からの日本の戦争の遂行と深く結び付いていることを知る。

【展示内容】

	大項目	中項目	小項目（展示例）
	空襲以前		太平洋戦争に至る「日本の戦争」の概観
大阪の空襲	背景	太平洋戦争（日米戦争）の概要	原因と経緯
		本土空襲の概要	なぜ無辜の民が無差別空襲に？（米軍の戦略、意図）
		大阪の空襲	なぜ大阪が空襲に遭った？（米軍の戦略、意図）
	実相	爆撃の手段	使用された航空機、構造的・機能的特色
		爆撃日時と出撃基地、爆撃内容	・空襲日時 ・出撃基地（成都→マリアナ基地（サイパン、テニアン、グアム））、機種、機数、場所 ・爆弾の種類・投下量 ・予告ビラ（伝単）
		爆弾の種類と威力	・爆弾、機雷、焼夷弾などのメカニズム
		被災地域の特色	・府内の被災地の図示、爆撃された理由 ・被害者（被災者）数、年齢、職業 ・爆撃されたもの/されなかったもの ＊文化財も例外ではなかったことを知る
		防空の実態	・行政当局の民間防衛の指導実態 ・防空壕、防空頭巾、消火・消防装置など
		空襲が語る教訓	・行政当局の視点 ・市井の人々、子どもの視点 ・軍部の視点
	歴史的意義（何を訴えているか）		・米軍戦略爆撃調査団の見解 ・他都市の空襲との違い
戦時	戦争と大阪	軍都大阪	軍事施設の配置図、設置年表 ＊砲兵工廠など大阪城周辺は別建てで詳しく

下の暮らし		大阪の産業	・重化学工業への特化と紡績業の衰退 ・原料・人員の不足
	地域		・戦時体制の強化（国防婦人会、統制・配給、供出） ・灯火管制、一升瓶精米 ・建物疎開 ・食料事情（献立、カロリー） ・大衆文化 ・戦意鼓舞に利用された動物、薬殺・絞殺された動物
	学校		・国民学校（カリキュラム、教科書、遊びなど） ・大阪の子どもの疎開先、疎開先での生活 ・勤労動員
	応召・出征、戦地の日々		・大阪出身者が多い部隊の設立、移動 ・大阪の徴兵者、戦没者の数
	外地の大阪人		・満蒙開拓団の暮らし ・大阪市立興亜拓殖訓練道場跡

②「焦土からの復興/平和の創造」

【狙い】

○空襲とともに、占領と復興（その時代を生きた人々の苦労、頑張り）も「大阪の記憶」として次世代に引き継ぐ。

○平和を築いていくために何が必要か、自分はどう行動すればよいかを考える。

【展示内容】

大項目	中項目	小項目（展示例）
焦土からの復興	終戦と大阪	・終戦を大阪はどのように迎えたのか（行政当局、関係民間団体、市井の人々） ・苦しい生活（特に引揚者や戦死者遺族） ・占領下の大阪（接収された建物、闇市）
	復興と大阪	・被災地の復興計画と実態 　・多くの労苦の実相と問題、解決（土地区画整理、交通復興） 　・政府、米軍との関係 ・大阪万博までの復興の実相と教訓（青空教室、バス住宅、復興博覧会、ニュータウン） ・大衆文化の復興など、他の主要都市の復興との相異、誇れる点
大阪の復興から見た平和の発信	大阪の価値	大阪は日本の中でいかなる価値を持ち、いかなる役割を演ずべきか（戦前・戦災を通じて得られた教訓（地理的、経済的、政治的、文化的……））
	戦災を通じて得た平和の意義	
	府/市・諸団体の平和に対する理念、活動の実態	
未来を見つめて	平和への取組み	
	大阪ゆかりの人々の活動（平和維持、人道、社会発展……）	